

サントクロウ
歌うてくれた
成井 豊



2573 成井豊

I313.45
J6552

宙ブックスハンディハードカヴァーズ①
サンタクロースが歌ってくれた

なるい ゆたか 1961年埼玉県飯能市出身。B型・天びん座。早稲田大学第一文学部卒。早大在学中に劇団てあとろ50で作・演出をつとめ、1985年演劇集団キャラメルボックスを結成、作・演出を担当する。代表作は「不思議なクリスマスのつくりかた」「サンタクロースが歌ってくれた」など。戯曲集に「不思議なクリスマスのつくりかた」(JICC出版局)がある。都内の高校で国語を教えるかたわら、劇団で年3回の公演を行うほか、小説、エッセイ、TV台本の執筆と超忙しい毎日をおくっている。好きなものはチョコレート。特技はバック転。

著者 成井豊

発行人 北脇信夫

発行所 株式会社宙(おおそら)出版
〒162 東京都新宿区山吹町4-7
電話 03-260-6353

発売元 株式会社主婦と生活社
〒104 東京都中央区京橋3-5-7
電話 03-563-5121(販売)
振替 東京 0-36364

印刷所 興陵印刷株式会社

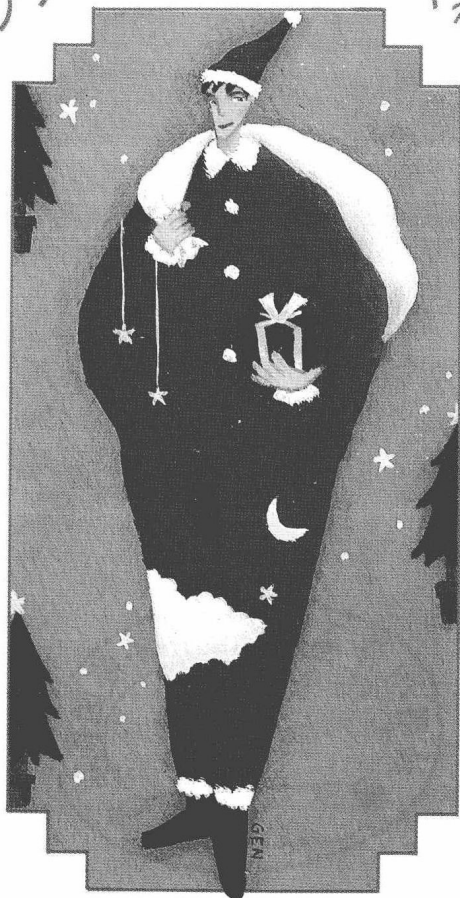
製本所 若林製本工場

©Ozora Shuppan 1990 Printed in Japan

落井・乱丁にはお取りかたいます

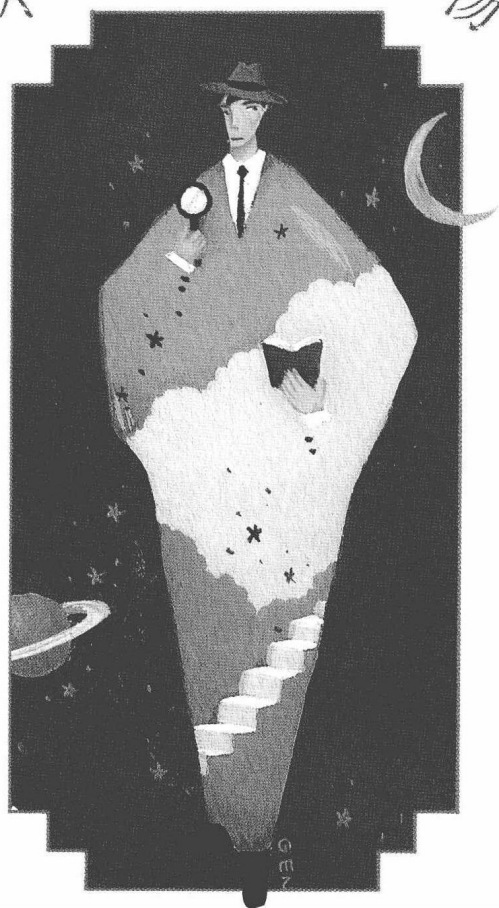
ISBN4-391-11324-4

サンタクロースが歌ってくれた



成井豊

人カヲ探偵物語



成井豊

ハイカラ探偵物語

目次

序章

パノラマ塔奇談

11

第一章

ラインの雫

20

第二章

黒蜥蜴^{とかげ}現わる

32

第三章

逮捕、そして脱走

54

第四章

第二の挑戦状

65

第五章

罨

78

第六章

推理試験

96

第七章

少女探偵団、追跡す

112

第八章

海底美術館

132

第九章

初級暗号講座アラン・ポー伝

150

第十章

魔女と名探偵

171

終章

黒蜥蜴^{とかげ}の最期

193

序 章 パノラマ塔奇談

大正五年九月――

その夏最後の台風が、東京上空を駆け抜けた日、芥川龍之介は久しぶりに家を出た。

日差しは、すでに西へ傾き始めている。昼下がりの風が、道端の柿の木の枝を揺らしている。

三日ぶりの外出である。もちろん、三日も家の中に引きこもっていたのは、台風のせいばかりではない。中央公論から依頼された原稿に、昼も夜もなく、かかりきりになっていたのだ。台風のままき散らす激しい雨が上がると同時に、なんとか原稿も仕上がった。そこで、気晴らしの散歩に出たというわけだ。

龍之介の家は田端にあった。駅まで歩いて山手線に乗り、上野で降りて、市電に乗り換える。

釣り草につかまって、窓の外を走り過ぎる町並みを眺めていると、知らないうちに口もとに、笑

みが浮かんでくる。一つの作品を完成させたという充実感が、龍之介の気分を高揚させていた。

——なかなか面白いのが書き上がった。これなら久米も菊池も文句を言うまい。

久米正雄と菊池寛の顔を思い出すと、口もとの笑みはさらに大きくなった。あの二人のことだ。けつして誉めてはくれないだろうが、かと言って貶^{けな}すこともできず、眉を寄せて、唇を尖らせて、きつと黙ってしまうだろう。

この年の二月、龍之介は、久米や菊池、それに松岡譲、成瀬正一らと、第四次新思潮を発刊した。みんな、一高からの同級生である。つき合い出して六年にもなるので、口に出さなくても、何を考えているかはすぐにわかる。みんな作家になりたかった。友人であると同時に、ライバルでもあったわけだ。そんな中で、まず最初に認められたのが、龍之介だった。

認めたのは、漱石だった。新思潮の創刊号に発表した『鼻』が、はからずも夏目漱石の目に止まり、激賞を受けた。漱石直筆の手紙には、「敬服しました。ああいうものを是から二三十並べてご覧なさい。文壇で類のない作家になれます」とまで書いてあった。

友人の間では、それほど評判がよくなかっただけに、龍之介の気持ちは奮い立った。当代随一の作家が認めてくれたのだ。調子に乗らない方がおかしいだろう。それから半年の間に、十編もの小説を書き上げた。が、書けば書くほど、小説の難しさが分かってくる。これは、というものがなかなか仕上がらない。誉めてもらえたのはうれしいが、期待に応えなければという重圧は、さらに重くなるばかり。

苦しみ抜いて書いたのが、『芋粥^{いもがゆ}』だった。新小説の九月号に載ると、さつそく木曜会に持参した。木曜会とは、夏目漱石の弟子たちが、毎週木曜に早稲田南町の漱石山房に集まる会合である。一読した漱石は、『鼻』には及ばないが第二の傑作と折り紙をつけてくれた。

これで自分はなんとかなる。『鼻』はただのまぐれあたりではなかったのだ。龍之介の気持ちは、再び奮い立った。そして次に取りかかった小説が、つい先ほど完成したばかりなのだ。題名は『手巾^{てぬぐい}』としよう。きつと漱石先生も、喜んでくださるに違いない。

日本橋で市電を降りた時には、西の空は茜色に染まり始めていた。

龍之介は、通りに沿って真っ直ぐ歩き、丸善の四階建てのビルに入った。ここが、今日の散歩の目的地だった。すぐに奥の階段を昇って、二階の洋書売り場に向かう。

ここへ来ると、時間の経つのを忘れる。友人と一緒に来て、ふと回りを見回すと誰もいない。困っていると店員が、お連れさんなら先に出了らましたよ、この先のカフェーで待ってるそうです。そう言われて、慌てて飛び出したことがある。友人の話によると、一心不乱に目を走らせているので、とても声をかけられなかったそうだ。

文芸書のコーナーに来て、龍之介はふと立ち止まった。棚に並んだ本の中の一冊が、後ろを向いている。背表紙を奥にして、差し込んであるのだ。

——これでは、何の本かわからないじゃないか。

龍之介は、その一冊を抜き取った。表紙を見ると、『Al Aaraaf, Tamerlane, and minor poems』

とある。この本なら、一高時代に読んだことがある。エドガー・アラン・ポーの詩集だ。ページをパラパラめくっていると、真ん中あたりに紙が挟んであった。葉^はかとも思ったが、真^まっ白^{しろ}で何も書いてない。いや、隅の方に、小さな文字が書いてある。文字ではなくて数字だ。

5) 5 7 ?) 5 / 6 ? * 6 7 5 6 * 6 : 8 9 5 : ?

まったく意味がわからない。こういうでたらめな数字と記号の羅列が、確かにポーの作品の中にあつた。題名は『黄金虫』だったつけ。

そう思つて、書棚を見回すと、一番上の段の隅に、『The Complete Works Of Edgar Allan Poe』という文字が並んでいた。ハリソン版の全集だ。背伸びをしてその中の一冊を抜き出し、ページをめくると、あつたあつた。やはり『黄金虫』に間違いない。海賊キッドの暗号だ。これと同じ方法で解けるのかな、と一字ずつ照らし合わせてみると、

5 は a

∪ は s

? は u

6 は i

*はn

・はt

8はe

9はm

と八字はわかるが、「7」と「/」がわからない。それでもとりあえず、わかっている八字だけあてはめてみると、

asas7usaa/iun7a in itematu

どうやら、『黄金虫』の解読法を利用していいようだ。残りの「7」は「k」、「/」は「j」に違いない。すると読み方は、

あさくさじうにかいにてまつ

——泥棒の密会か。それともただのいたずらか。せっかく解けたんだ。行ってみるか。
小説が書き上がった解放感からか、龍之介は、薄暗くなりかかった東京の街を、浅草に向かっ